

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和2年度学校評価 計画

達成度（評価）	
A	十分達成できている
B	おおむね達成できている
C	やや不十分である
D	不十分である

様式1(小・中)

学校名	嬉野市立嬉野中学校		
1 前年度 評価結果の概要	「まなび力」の視点から ○基礎・基本の徹底 ○「知力・体力・人間力」の向上 ○生徒主体の活動を多く取り入れた「学びの質」の向上 「きずな力」の視点から ○「多様な価値観や違い」を認め、「自他の尊重」を行動として実行できる生徒の育成	「しぐさ力」の視点から ○やるべきことをいつでもどこでも発揮できる「本物の力」の育成	○普段の生活(基本的生活習慣)の充実

2 学校教育目標	夢に向かう颯爽とした生徒の育成 ～「嬉中まなび力」「嬉中しぐさ力」「嬉中きずな力」～		
----------	---	--	--

3 本年度の重点目標	1 学力の向上・・・「小中連携による学力向上推進地域指定事業」を活用した学力向上対策（西部型授業の徹底、学習規律・家庭学習の定着） 2 たくましさや自信の育成・・・家庭や地域連携を強化した、指導・評価・支援（基本的生活習慣の定着、不登校支援） 3 人権意識の向上・・・様々な価値観や違いを認め合う人間関係づくり（人権・同和教育、道徳、学活等）		
------------	---	--	--

4 重点取組内容・成果指標	中間評価	5 最終評価	学校関係者評価	主な担当者
---------------	------	--------	---------	-------

(1)共通評価項目					主な担当者					
重点取組			中間評価			最終評価				
評価項目	取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	達成度 (評価)		実施結果	評価			
●学力の向上	●全職員による共通理解と共通実践	●学力向上対策評価シートに示したマイプランの成果指標を達成した教師90%以上	・西部型授業の徹底。 ・TTを積極的に活用し、生徒一人一人の能力に応じてきめ細かな指導を行う。	B	・西部型授業を柱に、チームティーチングや少人数によるきめ細かな指導や、言語活動を工夫した授業に取り組むことができた。また、12月の佐賀県小・中学校学習状況調査の結果において、ほとんどの教科が学力向上対策評価シートに設定した到達目標を達成することができた。	A	・具体的な取り組みができ、ほとんどの教科で学力向上対策に取り組む、目標を達成している。 ・小学校までと各段の伸びがみられるのは、細かい指導の日々の実践の賜物だと思う。	・学力向上 コーディネーター ・研究主任		
	○学習意識向上・学習規律・家庭学習の定着	○毎日家庭学習のできる生徒85%以上 ○課題・宿題の提出率85%	・小中連携を生かした9年間の計画的な学習指導を進める。 ・自主学習について、具体的方策を提示する。 ・個に応じた課題の質や量を工夫する。 ・家庭での学習時間や生活リズムについて振り返らせる。	B	・自主学習においては、自学コンテスト等を行い、生徒の意欲を喚起するとともに、学習方法のモデルを提示した。学力差に応じた自主学習への取り組み方として、今後習熟度別プリントを準備する。課題忘れが一定数あり、課題専用ファイルを用意するなどの方策を考え、取り組んでいく。また、家庭での時間の使い方を見直すため、タイムスケジュール表の記入を行わせる予定である。	A	・全学年とも生活記録表の記入を行った。家庭での生活の見直しができ、それに伴い学習に取り組むやすくなったという生徒も増加した。「毎日家庭学習をしている」生徒は、時間の長短はあるが90%以上、「毎日宿題をしている」生徒は、「どちらかといえばしている」生徒を含め85%程度という結果であった。来年度も生活記録表の記入を継続するとともに、宿題の提出率を上げるために、生徒が日々の宿題を把握・管理できるような方策をとっていく。	A	・家庭学習習慣化に向けて全職員で取り組んでおり、評価できる。 ・提出物等の把握と規律づくりは教育活動の根本である。そこに重点を置き、良くなるように工夫されていることに良さを感じる。	・学力向上 コーディネーター ・研究主任 ・指導法改善
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○人権・同和教育、道徳等を基本においた人権意識の向上 ○コミュニティ・スクールを活用した地域との連携の充実	・QUテストの考察を行い、人権の視点に立った授業や体験活動を行う。 ・「生きる力」の教科書を使用し、人のかかわりについて考えさせる。 ・時代に即したLGBT教育に取り組む。 ・コミュニティ・スクールを基盤とした地域行事への積極的参加を促す。	B	・QUテストの考察と研修を行った。コロナ禍における差別や偏見防止の学習や平和学習を行い人権について考えを深めることができた。制約がある中ではあるが、地域と連携した体験学習を今後も実施していく。また、LGBT教育を進めていく。	B	・第2回目のQUテストの結果、要支援群の生徒数が前年から減少した。コロナ禍の中、対策を取りながら実施可能な地域行事に参加ができた。また、体育大会・文化発表会などの学校行事を通して、自他を尊重する心、他者への思いやり、人権意識を高めることができた。	B	・コロナ禍でありながら、心の教育に必要な行事を工夫し、実践されたことは高く評価できる。 ・コミュニティとの連携をさらに深めてほしい。	・人権・同和教育 ・学校行事企画
	●いじめの早期発見、早期対応体制の充実	○「いじめを受けていない、いじめをしていない、いじめを見逃していない」という回答が95%以上 ○「いじめ」の認知を5件以下	・「いじめ」に関する定期的な指導と喚起を促し、予防と撲滅を図る。 ・情報リテラシーについての知識を高め、SNSの危険性への意識を高めさせる。 ・教育相談活動の充実を図る。	B	・「いじめをしていない、受けていない」の全校平均が92.5%、「いじめ」の認知が2件であった。定期的なアンケートや教育相談を通して、いじめの発見や予防に努めている。SNSアンケートで実態調査を行った。今後は情報モラルの講義を行う予定である。	B	・「いじめをしていない、受けていない」の全校平均が93.3%、「いじめ」の認知が3件であった。定期的なアンケートや教育相談を通して、いじめの発見や予防に努めている。また、SNSの正しい使い方の講話を行い、情報モラル教育を推進することができた。	B	・いじめが何件かあるのは、学校という集団の中では仕方ない。全職員でいじめ撲滅に向けて取り組んでおり評価できる。	・生徒指導 ・教育相談
	○おもてなしの精神できちんとした挨拶と毎日の丁寧な掃除	○「挨拶ができていない」の項目の好意的な評価が90%以上 ○「掃除を時間いっぱい意欲的に行っている」の項目で好意的評価が90%以上	・「挨拶ができていない」の項目の好意的な評価が90%以上 ・「掃除を時間いっぱい意欲的に行っている」の項目で好意的評価が90%以上	・挨拶の目的と意味を知らせ、場に応じたやり方を指導する。 ・掃除では、年度初めに掃除の仕方を身につけさせ、継続的に指導を行う。	B	・「あいさつや掃除がいつもきちんとできている」に対し「よくあてはまる・大体あてはまる」と回答した生徒が全学年90%以上となっている。よくあてはまると回答した生徒が50%程度のため、全校生徒が自信をもって「よくあてはまる」状態になることを目指したい。	B	・「あいさつや掃除がいつもきちんとできている」に対し「よくあてはまる・大体あてはまる」と回答した生徒・職員は第一回より増加した。学校生活における継続的な指導の成果である。ただ、家庭生活での挨拶・挨拶には課題が残る。	B	・あいさつができる生徒が90%ということは評価に値する。 ・凜とした挨拶と行動は小学生のお手本となっている。地域や保護者との連携もさらに強化する。
●健康・体づくり	●「望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成」	●「健康に食事は大切である」と考える生徒90%以上	・家庭と連携し、「朝ごはん」に積極的に取り組む。 ・給食へ感謝する気持ちをもたせる。 ・気候や感性状況を意識し、自己の健康管理を意識させていく。	B	・朝ごはんを毎日きちんと食べてきている生徒は56.6%とやや低いが、75%が健康に気を付けているという意識がある。家庭と連携して、毎日食べる習慣をつけさせたい。	A	・給食をしっかりと食べ、健康に気を付けているという生徒の割合は、1年90%、2年94.1%、3年97.8%と高かった。また、朝食をきちんと取らせ、体調管理に気を付けられている家庭も90%以上であった。今後も健康と食事を関連させ、朝食を毎日きちんと食べる習慣をつけさせたい。	A	・食育に関しては、学校の給食指導や家庭での朝食の喫食率等からよくできているといえる。 ・食は健康の基本であるため、栄養教諭等の計画的な活用による食育に充実を望む。	・給食指導・食育
	○望ましい生活習慣の形成	○時間を意識して、規律ある生活をおくれる生徒85%以上	・家庭と連携し、「早寝、早起き、朝ごはん」に積極的に取り組む。 ・ノーテレビ・ノーゲームデーとの取組と連携し、家庭での時間の使い方の改善を図る。	B	・時間を意識して、規則正しい生活が送れている生徒は、約70%とやや低い。家族と連携して積極的に取り組ませる。	B	・規則正しい生活が送れている生徒は、全体の半数と低くなっている。全くできていない生徒も1割ほどいて、家庭と連携を取り生徒が生きて生活できるよう積極的に取り組む必要がある。	B	・規則正しい生活というのは学校だけの指導ではどうにもならない。家庭との連携がさらに必要だと思う。	・養護教諭 ・学年主任
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外勤務時間の上限を遵守	・定時退勤日の設定 ・学校閉庁日の設定 ・部活動休業日の設定 ・効果的・効率的な業務推進	B	・完全に実行できている職員は20%とやや低い。日常業務を振り返り、習慣化と週・月の見直しによる長期計画を促し、自己改革を図らせる。	A	・85%以上の職員が改善を意欲し、業務改善を行っている。担当や行事等によっていらかの偏りは見られるが、工夫し効率化を考え、超過勤務時間45時間以内に収まっている。今後はストレス軽減についても方策を図りたい。	A	・勤務の特殊性で厳しい中、全職員が意識しながら働き方改革に取り組んでおり、高く評価できる。 ・部活動等の精選も考え、地域単位での活動への移行も検討することも必要である。	管理職

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目					主な担当者					
重点取組			中間評価			最終評価				
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	達成度 (評価)		実施結果	評価			
○特別支援教育の充実	○教員の専門性と意識の向上		・指導方法の研修を深め、学習環境のUD化を進める。 ・特別支援委員会やケース会議を適宜開催し、学校全体での支援体制を構築する。 ・特別支援スーパーバイザーの指導助言を日々の教育活動に取り入れる。	B	・見やすい板書計画やチョークの色を工夫して授業実践をしている職員は90%である。 ・支援を必要としている生徒の見方・考え方に差があり、個別の支援計画の作成が、支援を必要としている生徒の70%程度と低いので引き続き特別支援の研修を深めていきたい。	B	・学習環境のUD化は十分達成できた。授業では電子黒板やデジタル教科書を用い、わかりやすく、見やすい教材の準備ができた。また、個別の対応としてルビ付き問題や拡大プリントなど対応できた。 ・支援の必要な生徒の、個別の支援計画を作成することができた。活用が十分にできていないので、今後は活用方法を検討していく必要がある。	A	・多様な生徒がおり、個別に対応していくことは今後も課題となってくる。PDCAサイクルをきちんと回していかなければならない。 ・実施状況を見てみると具体的な取り組みがほぼ目標通りにできている。	・特別支援教育

●・・・県共通 ○・・・学校独自 ◎・・・志を高める教育

5 総合評価・ 次年度への展望	○「まなび力」の視点から 評：①学力に関しては全体的に向上しつつあるが、個別にみれば差が大きい。②家庭学習については大半の生徒が行っているが、時間的・質的な面で指導が必要。 展：①授業においては、さらに表現力を重視した学習指導を工夫する。②家庭学習の充実を図るため、保護者への喚起を行い協力を依頼する。 ○「しぐさ力」の視点から 評：校内でのあいさつや掃除はできているとの評価を得ているが、地域や家庭においては十分にできているとは言えない。 展：家庭や地域との連携を重視し、生徒の見守りや声かけをさらに深めてもらう。 ○「きずな力」の視点から 評：①コロナ禍ということもあり、学校や地域での活動が十分にできていない。②人権について学習し、頭ではわかっているが、学校内で不用意に相手に不快感を抱かせるような発言がある。 展：①どんなに状況が変わろうとも、地域の協力や支援を得て、工夫して行事等を開催し、生徒の活動の場を広げたい。②職員・生徒ともに高いアンテナをもち、間違った言動に「おかしい」と気づき指摘できる人権感覚を磨く。			
--------------------	--	--	--	--